

第 2 章

課題研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業研究、またはそれにつながる取り組み

(2) 主題設定の理由

一昨年度と昨年度は「協同学習をベースとした主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業実践」を主題として、研修部が割り振りし、各教科等の授業で一人一つの研究授業を行った。これを行うことで、生徒の課題解決能力を高め、キャリア発達を促すことを目指してきた。その結果、成果と課題については表1のとおりである。

	成果	課題
一昨年度	・「深い学び」の観点を取り入れた授業の在り方が見えてきた。 ・指導案やレポートの作成に伴って、MTとSTの打ち合わせが自然と増えてきた。 ・参観者を研修部が割り振ることで、参観者が少ない、偏るといった課題が解消された。 ・参観者もレポートを作成することで、授業者の今後の授業づくりに役立ててもらうことができた。 ・実践の蓄積により、教科等横断的な学習の推進を意識した単元配列表を整えることができてきた。	・「授業者の意図とは違う動きをしてしまった」といった、打ち合わせが足りなかったという反省が多く見られた。
昨年度	・指導案の様式を工夫したことで「主体的・対話的で深い学び」のうち、どの観点で単元や授業を進めるかを明確にすることができてきた。 ・これをしたが効果的ではなかったため次はどうする、といった「次につながるレポート」が増えてきた。 ・MTとSTの連携による効果的なTTの実践ができてきた。 ・以上により「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」が形になってきた。	・参観者は研修部が割り振ったが、授業の関係上、参観者が偏ってしまう学年もあった。 ・目標達成のための指導方法や効果的な教材の乏しさも見受けられた。 ・授業後の生徒の変容について評価している職員が少なかった。 ・学年を問わず、教科間等での情報の共有や研修などをおして職員の専門性を高めていく必要がある。

表1 過去2年間の課題研究における成果と課題

これを受けて、今年度も何かしらの形で研究授業を中心とした授業研究を推進しようと検討してきたが、第1章で述べたとおり緊急事態宣言に伴う臨時休校が決定したことを踏まえ、研究の進め方の検討を重ねた。その結果、昨年度まで行ってきたような研究授業（各学年から参観者を最低1名選出して参観していただく）は困難であると判断した。研究授業を録画し、その後協議会を開いてよりよい授業づくりに向けて話し合うという方法も検討したが、録画という新たな方法を取り入れることによる生徒への心理的な影響を考慮すると避けた方がよいという結論に至った。さらに、臨時休校に伴う授業や会議の変更が相次いでいるため、教職員の業務負担軽減という観点からも望ましくないと判断した。

よって今年度は、従来方式の研究授業は行わず、第8次研究主題に沿って、さらに過去2年間の成果と課題を踏まえて、個人研究を進めることにした。研究授業以外にできること、MTを持たない教職員もできることを考えた結果、「主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた授業研究、またはそれにつながる取り組み」の種類を6つに分け、各自自由に選択してもらうことにした((5)参照)。また、4つの研究の経過を共有する全体研修会において、同じ選択をした教職員同士が情報・意見交換する時間を設け、互いの実践の深化に役立ててもらおうことにしようと考えたが、アンケートの結果を見ると選択肢ごとの人数に大きなばらつきがあったため、学年ごとに2つのグループに分かれてこれを行っていくことにした。

次年度は、今年度の成果と課題を踏まえ、また新型コロナウイルスの影響による状況を勘案して、「学校の新しい生活様式」に沿った「主体的・対話的で深い学び」の実践について研究を深めていきたいと考えている。

(3) 仮説

「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業研究、またはそれにつながる取り組みを教職員各自が進め、実践について交流を深めることで、キャリア発達を促す教育活動の推進ができるのではないかな。

(4) 推進日程

月日	取り組み	主な内容
5月29日(金)	課題研究アンケート①配布	個人研究を進めることについて意見募集
6月10日(水)	課題研究アンケート②配布	6つの選択肢から実践を選択してもらう
6月26日(金)	全体研修②	各自の実践の計画交流
10月16日(金)	全体研修③	各自の実践の経過交流(中間)
2月5日(金)	全体研修④	各自の実践の経過交流(最終) 次年度の取り組みについて意見交流

(5) 教職員各自の実践

	1学年所属	2学年所属	3学年所属
① 実態把握の工夫			金子、中島
② 指導・授業計画の工夫		石川	亀田
③ 教材・教具の工夫	飯嶋、内田、高野 小林、田中、和田	穴田、工藤、佐野 祐川、須田	五十嵐、高山、出村 福井
④ 指導・授業展開の工夫	石井、海田、成島 藤本、矢倉、吉田	石田、大槻、高瀬 中市、成田、村田	青山、野呂、山本
⑤ 学習評価の工夫	村瀬		津村、西脇
⑥ 関係部会(学年、学科、教科等)への情報提供や助言	山田	橘	小笠原

2 研究の実際

6月の全体研修②において教職員各自の計画（選択・設定した実践）について共有した後、各自の取り組みやすい時期・ペースで取り組み、残り2回の全体研修で取り組みを終えた教職員から順次発表してもらうこととした。しかし、10月の全体研修③において5名の発表にとどまり、これでは2月の全体研修④における報告者が過多になってしまう状況となった。このため、11月から職員会議後に「ミニ全体研修」を設定し、そのときまでに取り組みを終えた教職員はここで発表してもらうことにした。さらに、全体研修④の後に設定している後期還流報告会（校外研修を行った教職員がその報告をし、全体に還元する場）においても発表の時間を設定した。各学年の研修部員が所属学年の教職員に適宜声を掛け、設定した時間内に全ての発表を終えることができた。

発表の方法は、研修部で作成したレポート様式を使用した。文章量は特に指定しなかったが、2枚程度にまとめる教職員が多かった。実践の内容によっては、表や写真を挿入したり、項目を起こして要点をまとめたりと、各自工夫してレポートを作成した。完成したレポートはPDFにして校内LANに保存し、発表時に一斉に閲覧できるようにした。発表者には、時間と人数の都合上1分程度という極めて短い時間での発表をお願いすることになったが、自身の成果と課題について要点をまとめ、実践を全体に還元してもらった。

選択・設定した実践は「③教材・教具の工夫」と「④指導・授業展開の工夫」に集中していたが、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえたうえでの主体的・対話的で深い学びにつながる実践の工夫が多く見られた。3密を避けるため、特に大集団での活動が制限されるなかで、小集団での学習活動の良さやICTを生かした実践がなされた。発表を受けて、自身の授業・指導に取り入れてみた、発表に向けてまとめたことで更なる工夫と改善に取り組んだ、という教職員もいた。

（各実践レポートは、資料を参照。）

3 成果と課題

結論から述べると、仮説『『主体的・対話的で深い学び』の視点を取り入れた授業研究、またはそれにつながる取り組みを教職員各自が進め、実践について交流を深めることで、キャリア発達を促す教育活動を推進する』ということは、おおむねできたと考える。

(1) 成果

昨年度までは、指定された授業で研究授業をしてもらい、参観者も各学年から必ず出してもらうというお願いが多かった取り組みだった。しかし今年度は各自が取り組みやすいテーマを選択し、日々の実践を重ね、きりの良いところで発表してもらうという自由度の高い取り組みにしたことで、昨年度に比べて研究への負担が少なくなったという声が多く聞かれた。また、日々の実践を基にもらったため、授業や指導、分掌業務などに還元しやすく、いわば「地に足の着いた」取り組みにすることができた。

(2) 課題

レポート発表を受けて、自身の実践と関係する教職員は刺激を受けることができたと思われるが、時間をかけて意見を交わすといった「交流を深める」ような取り組みには至らなかった。特に今後の本校の在り方に関することや、多くの生徒への授業・指導に有効と思われるものについては、学校全体としての実践にしていくことが必要と思われる。こうした「芽」を見逃さずに協議していくという視点を持ち、研修部や教務部をはじめ関係する部門・部署あるいは各自がアンテナを張っていったならば、主体的・対話的で深い学びを本校に根付かせる、循環させるというカリキュラム・マネジメントが可能になり、生徒や時代のニーズに則した教育活動ができるのではないかと。

(3) 3年間を終えて

この3年間、研究授業やレポート発表を通して、全員が同じ研究主題・仮説を出発点としてそれぞれの立場・役割に応じた実践を重ね、それをできるだけ多くの教職員で共有できるようにしてきた。そうすることで、主体的・対話的で深い学びとは各教科、題材、生徒、教職員の経験など様々な条件によって千差万別の形があることを知ることができた。以前から取り組んでいることが実はすでにそうであったり、少し手を加えていくことで実現できたりするものであったりすることを目の当たりにしたことで、教職員各自が、また教職員同士の協働によって、主体的・対話的で深い学びを意識した授業・指導に取り組むという空気が学校として定着してきた。よって、第8次研究における課題研究の目的は、今年度で達成することができた。

一方で、各自が研究授業やレポートに取り組むという「一人1つの〇〇」という研究の進め方は、見直す必要がある。これは、今年度10月から12月にかけて全教職員に実施したアンケートの結果、昨年度以前も今年度も負担が大きいという回答が多かったためである。特に今年度は新型コロナウイルス感染症対策に迫われたという背景もあり、日々の授業・指導、業務を優先するのは当然ではあるが、その質や量の変更を余儀なくされて余裕がなくなったり、立場によってはその過程に研究を織り交ぜていくことが難しい場合があったりした。

また、研究授業もレポート発表も12月以降に集中していた。これは、研究は研究として別個に取り組むほど難しく重荷に捉えがちになったり、優先順位が後になったりしたことを裏付けているのではないだろうか。特に今年度は全員がレポートを発表するとしたことで会議時間を圧迫してしまい、業務の多忙化を助長することにつながってしまった。

以上のことから、次年度以降は研究・研修の在り方や進め方を見直し、教職員が主体的に、かつ日常的に実践を積み重ねることで、より「地に足の着いた」研究・研修となるような仕組みへと再構築していく必要がある。このことについては、第6章で詳細に述べる。

資料 実践レポート（一覧）

No.	種別（選択項目）	実 践 名	ページ
1	実態把握の工夫	教育相談在り方、記録票の見直し	18
2	〃	個に応じた個別面談の在り方	19
3	指導・授業計画の工夫	作業学習における MT と ST との協議方法の工夫や単元計画の工夫	21
4	〃	作業学習を「主体的、対話的で深い学び」につなげるための授業計画の工夫	22
5	教材・教具の工夫	看板標示の工夫	24
6	〃	作業学習の礼儀道具の名前や基本作業の工程(手順)を分かりやすくするための動画の制作	25
7	〃	パワーポイント(PPT)、ワークシートの工夫	26
8	〃	ホームページや玄関のモニター等を活用した主体的な学びの促し	28
9	〃	生徒の印象に残る進路指導教材の作成	32
10	〃	農業に関わる技術、知識について生徒が理解しやすいように配慮したワークシートの開発	34
11	〃	窯業作業での自主的・対話的な学びにつなげる支援の工夫	36
12	〃	パワーポイント(PPT)、プリント作成の工夫について	38
13	〃	生活単元学習における話し合い活動の充実	40
14	〃	キャリア・パスポートの活用について	41
15	〃	エコクラフト製品の工程表の作成	56
16	〃	検定問題を取り入れた学習理解度の把握	57
17	〃	Zoom ミーティングを活用したオンライン決意発表会	58
18	〃	縫工製品の作業工程表と工程の単純化	60
19	〃	動画・画像(YouTube、Web サイト)を用いて、美術作品の完成見通しをもたせる取り組み	62
20	指導・授業展開の工夫	話し合い、意見を発表する	64

21	指導・授業展開の工夫	ソーシャルディスタンスで、生徒同士向き合って話し合う活動が制限されている中でのグループ活動の工夫	65
22	〃	ICT を取り入れた国語科の授業実践	66
23	〃	作業学習での指導助言、補助について	68
24	〃	教育アプリ「miyagi Touch」を活用した授業実践(話し合い活動における活用)	69
25	〃	国語の授業における話し合い活動の授業展開の工夫	71
26	〃	新型コロナウイルス感染症の感染禍における対策～全校での音楽発表の実施について～	73
27	〃	菊栽培を通して園芸の興味関心を高める	76
28	〃	国語の授業における言語活動の充実のための工夫	78
29	〃	言語環境の整備と言語活動の充実について	80
30	〃	敬語の使い方の指導について	82
31	〃	生活の中で活用できる数学の工夫	84
32	〃	委員会活動における共同・協力的活動について	85
33	〃	直接対話をせずに意見交流をする方法	87
34	〃	各教科等の横断的な実践と深い学びの視点での実践	90
35	学習評価の工夫	作業学習における観点別評価について	92
36	〃	くらしに役立つ保健体育～教科書を活用した授業実践～	93
37	〃	数学の主体的な学びにつなげる記録・評価の工夫	95
38	情報提供や助言	外部支援で見られる主対深	96
39	〃	様々な傷病についての情報提供について	97
40	〃	食に関する情報発信の工夫	98